



視野

山崎芳夫

日本大学医学部眼科学教室

今回の専門別研究会「視野」は日本臨床眼科学会時の開催から日本眼科学会総会での開催に移り、初めての研究会である。演題は一般演題8題, 教育講演1題, シンポジウム5題と, 質量ともに充実した発表と討論が行われた。

一般演題

第1席「Functional MRIによる一次視覚中枢 retinotopy の検討」

(慈恵医大) 高橋現一郎・他
汎用パーソナルコンピュータによる視覚刺激を行い, functional MRI で活動電位を同定すると, 後頭極の鳥距溝で活動電位が抽出され, 一次視覚中枢の retinotopy が正確に検出可能であることを明らかにし, 将来の他覚的視野評価法としての可能性を示唆した。

第2席「下垂体腺腫の耳側半盲再評価」

(千葉大) 宮内 修・他
ゴールドマン視野計による半盲の診断基準について下垂体腺腫を対象に再評価を行い, ゴールドマン視野計において耳側半盲を検出できない症例でもハンフリー視野計では判定可能であることを報告した。

第3席「両眼視野における binocular summation - 各網膜部位における視標サイズの影響」

(近畿大) 若山暁美・他
視能矯正の観点から両眼視野における binocular summation を評価する目的で, オクトパス視野計にスペースシノプトを組み込み, 視標サイズと両眼視感度の関係について検討した。両眼視下での視感度は単眼視下よりも高かったとし, その理由として受容野特性を反映していると述べた。

第4席「Laser in situ keratomileusis 術直後の網膜感度の評価」(白求恩医大) 王 帆・他
近視矯正手術 (LASIK) の術中合併症として60mmHg以上の高眼圧による網膜神経節細胞障害が知られてい

る。眼圧上昇の影響をM細胞系機能評価に有用な frequency doubling technology (FDT) を用いて検討した結果, すべての症例で術後2時間にM細胞系の機能低下が観察されたとの報告であった。LASIKは術中に, 短時間ではあるが著しい眼圧上昇をきたすことから, 今後の近視矯正手術の普及にあたり, 網膜神経節細胞への障害により視野障害がその重篤な合併症となり得ること明らかにした内容であった。

教育講演「眼底視野測定」(滋賀医大) 可児一孝・他
眼球には常に固視微動などの運動が存在するため, 投影式視野測定では網膜の同一部位に指標を繰り返し投影させることは稀である。そこで, 指標を眼底に直接投影して網膜感度を測定する眼底視野測定が試みられてきた。演者らは, 赤外線で眼底を照明し, ビデオで観察しながら眼底視野を測定する装置を開発し, さらに改良を重ね, 背景, 指標を自由に選択し, Maxwell 視での検査が可能な装置を報告している。今回は, さらにコンピュータを応用し, 固視微動に合わせた指標位置の制御により, 再現性の高い正確な眼底視野測定装置の試作機を開発するまでの経緯とともに, 眼底視野測定の歴史についての教育講演であった。

第5席「眼底疾患患者における眼底視野計の有用性」

(滋賀医大) 村田豊隆・他
赤外線眼底カメラ, 眼球運動追尾装置, 指標呈示装置から構成された, 眼球運動を自動追尾可能な眼底視野計を試作し, 各種眼底疾患に応用を試み, その成績を報告した。

第6席「新しい変視表 M-CHARTS®における変視量の再現性と視力との関係について」

(近畿大) 有村英子・他
演者らが開発した変視表 M-CHARTS®について, 検査結果の再現性と検査対象の視力との関係について検討を行い, 視力 0.3 以上の症例では再現性良好であるのに対し, 視力 0.2 以下の症例では検査指標が不明瞭となり検査実施困難であると述べた。

第7席「緑内障視野の測定点別解析 - ハンフリー Statpac2 解析と PROGRESSOR の比較」

(鹿児島大) 鶴木一彦・他
ハンフリー視野計 Statpac2 プログラムの各測定点別視野進行解析のアルゴリズムである緑内障視野変化確

率分析と PROGRESSOR の比較を行い、両者の特徴について解説を加えた。

第8席「中心視野障害をきたす緑内障」

(国立病院東京医療センター) 林 康司・他
早期緑内障において中心視野障害を伴う症例を呈示し、蛍光眼底撮影所見で乳頭黄斑線維に対応する放射状乳頭周囲毛細血管が脱落していることを示し、中心視野障害の原因として乳頭微小循環障害の関与の可能性を示唆した。

シンポジウム「緑内障早期視野異常検出に対する各種自動視野計の有用性」

緑内障早期視野異常検出法として量的視野計が、最近では自動静的視野計が普及している。近年、眼圧上昇に対し、太い軸索と大きい胞体径を持つ網膜神経節細胞が脆弱であることが明らかにされ、早期視野異常を検出する目的で網膜神経節細胞の機能別検査法が開発されている。今回は、各種の新しいアルゴリズムの有用性について検討する場として本シンポジウムが企画された。

シンポ第1席「ハンフリー視野計 (white on white : W/W)」 (慈恵医大) 高橋現一郎

ハンフリー視野計の white on white での測定法について、検査結果の信頼性、プログラムの選択、local fluctuation の評価について検討し、検査対象の年齢と検査回数が信頼性に有意に関係すること、SITA プログラムでは従来のプログラムと比較し、感度低下は浅く、暗点の範囲も小さく評価されること、short-term fluctuation の2倍以上の閾値変動を示す検査点は視野進行の可能性が高いことを明らかにした。

シンポ第2席「ハンフリー視野計 (blue on yellow : B/Y)」 (千葉大) 藤本尚也 青錐体系反応の抽出に有用なハンフリー視野計の

blue on yellow について検討を行い、blue on yellow は近視の影響を受け感度低下を示すため、屈折異常がなく、中間透光体混濁がない若年者の緑内障の早期診断に有用であると述べた。また、近視を伴う緑内障では、frequency doubling technology (FDT) が優れていると述べた。

シンポ第3席「オクトパス視野計 (white on white : W/W)」

(吉川眼科クリニック) 吉川啓司
オクトパス視野計 Program No. 32 を用いて mean defect (MD) が2dB 以下の早期緑内障診断について検討を行った結果、visual field index は局所性視野変化の判定には有効であるが、びまん性視野変化の検出にはやや精度が落ちることを示し、長期的な視野変化の解析には、loss variance (LV), mean defect (MD), short-term fluctuation (SF) が有用であることを報告した。

シンポ第4席「オクトパス視野計 (flicker)」

(近畿大) 松本長太
フリッカー視野はM細胞系の機能を反映し、屈折異常や中間透光体混濁の影響を受けにくく、検査内容がやや難しいという欠点はあるが、従来の明度識別視野よりも緑内障早期視野異常を容易に検出することを報告した。

シンポ第5席「Frequency doubling technology (FDT)」 (東大) 富田剛司

網膜神経節細胞の約10%を占めるM細胞系の中で、さらにその5~20%の割合であるMy細胞は低空間周波数および高時間周波数に高い反応性を持つことから、frequency doubling technology (FDT) は、My細胞の選択的機能検査であり、かつ従来の静的視野計測よりも視野異常が早期に検出可能であること、FDTの検査結果は視神経乳頭の立体形状解析結果とも有意に関連することを解説した。

MEDICAL BOOK INFORMATION

医学書院

メディカル クオリティ・アシュアランス

判例にみる医療水準

古川俊治

●A5 頁432 図9 表28 2000
定価(本体4,000円+税) ¥400
[ISBN4-260-13862-6]

人々の権利意識の向上に伴い医療訴訟の件数は毎年増加し、司法機関の要求する医療水準は非常に厳格なものとなっている。本書では日常診療で遭遇する事案を中心に、現在法的に求められる医療の質を明らかにしている。外科医と看護師を第一線で兼務し、医学・法学知識を併せ持つ稀有な人材の著者による、すべての臨床医必読の1冊。判例360余例を表にて添付した。